

「年史編纂委員会」設置について

飯 謙

神戸女学院では2016年度より「年史編纂委員会」を設置し、『150周年史』編纂に向けて一歩踏み出しました。委員の互選で、飯が委員長に任じられました。神戸女学院の歴史はわが国の近現代史と重なりますが、この分野はわたしが本来専門とする領域ではありません。しかし長年、神戸女学院に連なることをゆるされ、またその歩みとそこから考えられる意味を学んできた者として、皆さまのお支えとお助けをいただきながら、責務を全うできるよう微力を尽くします。本欄では、委員会成立の経緯を報告させていただきます。

『150年史』編纂については、関心をもつ人の間では早くから話題になっていましたが、正式な会議で話し合われたのは、2015年6月23日開催の第2回史料室運営委員会が最初と思われます。河西秀哉先生が他大学の年史編纂に関わる資料を説明され、席上で本学院における取り組みにつき、集中的な討議が必要であるとの議論が起きました。これを受け、同7月23日に臨時史料室運営委員会をもち、史料室専門委員および事情に通じた中高部教員をメンバーとする「第一次年史編纂委員会(仮称)」の発足が決定されました。この会合は夏休みを挟んだ同9月28日に、招集者の蔵中さやか図書館長(史料室室長)、和氣節子教授(英文学科)、中野敬一教授(総合文化学科)、河西秀哉准教授(総合文化学科)、津上智実教授(音楽学科)、北田京子教諭(中高部)、石村真紀図書館課長、井出敦子院長室課長、佐伯裕加恵史料室職員および飯が出席して行われました。討議の結果、河西先生のご指導を仰ぎながら『150年史』の編纂を進めていくことを始めとして、次のような活動方針を立てました。

- 1) 『神戸女学院百年史』に並ぶ『150年史』および『各論』（あるいは『資料編』）を出版する。この機会に出版を見送ると、今後175年史、200年史の編纂も困難となる。『150年史』の出版には資料の掘り起こしと整理の意味があり、それは現在神戸女学院に連なる者の責務と考える。
- 2) 『150年史』では創立101年以降150年までの叙述を優先する。100年までは『百年史』を簡略化して叙述。新資料の発見などで変更点がある際、その根拠は『各論』で対応する。
- 3) そのための史料発掘と整理、およびデジタル化を主たる業務とする「150年史編纂室(仮)」を設置する。史料室は「編纂室」とは別に現在の業務を継続する。
- 4) 「編纂室」に実務を担当する専従者(職員)を1名採用するよう希望する。
- 5) 専従職員は、歴史学あるいは文化史等の領域で修士課程もしくは博士課程の訓練を受けた者が望ましい。職務は、河西先生のご指導のもと、『150年史』執筆者サポートのための史料把握、史料整備、出版関連事務全般にわたる。

学院は11月16日までに常務委員会と部長会で「年史編纂委員会」の設置と活動方針の大枠を承認しました。専門部署の設置、専従職員、予算化については2016年3月まで話し合いを続け、①事務分掌は図書館史料室とし、専門部署設置は作業が本格化した段階で改めて申請、②年史編纂作業に関わる費用は当面、図書館(史料室)の予算をあて、特別なプロジェクトは予算外予算を申請、③役職とは無関係に現行メンバーを構成員とし、必要に応じて増員する、等を申し合わせました。専従職員は、佐伯裕加恵氏が専任としてその任を負ってくださることとなりました。

2016年度には、年史編纂委員会規定の制定、各部署所蔵資料の調査、史料提供の呼びかけ、勉強会の開催を行い、すでにいくつもの成果をあげています。特に2回開催した勉強会では、『百年史』を戦前と戦後に分け、その記述の妥

当性を問う、有意義な機会となりました。佐伯委員が発題、河西委員がコメントを担当くださいました。記して感謝申し上げます。

年史は歴史の単なる回顧ではありません。後代に生きる人が、何かの岐路にさしかかったり、あるいは行き詰まりを覚えるときに重要な役割を果たす先達からのメッセージを提供します。そのことを心に刻み、『150年史』の編纂にあたってまいります。

(年史編纂委員会委員長)